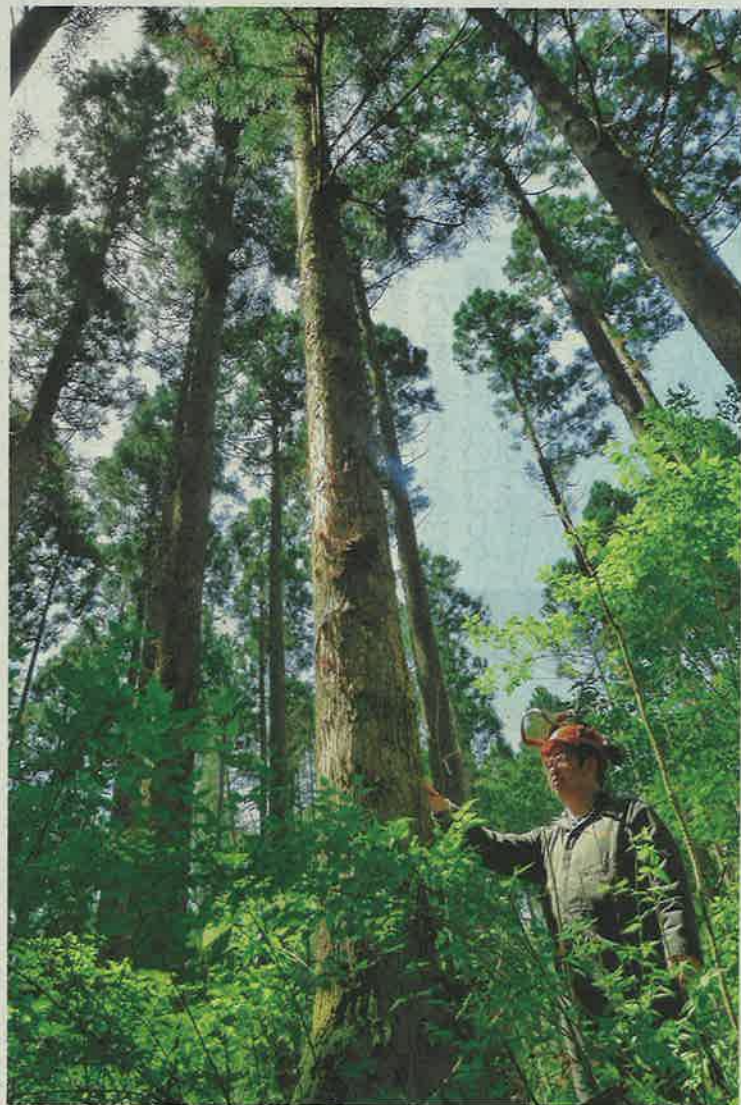


南三陸杉 魅力伝える



良好な環境で育った南三陸杉を見上げる佐藤さん
＝南三陸町入谷

高い強度、美しい木目

地元企業など連携

南三陸町で、環境に配慮した森林経営を促す国際機関「森林管理協議会（FSC）」の認証を受けた南三陸杉の魅力を発信する動きが活発化している。海のイメージが強い町だが、良質な木材の産地としても知名度を高めようと関係者は連携を強める。

青空に向かって真っすぐに伸びる杉木立。町で林業を営む「佐久」が管理する森林だ。樹齢は50年ほどで、高さ20メートルを超える。

「太らず縦に成長するのが南三陸杉の特徴。年輪の目が詰まって強度が増し、木目も美しくなる」。佐久の専務で南三陸森林管理協議会のメンバー、佐藤太一さん(36)が説明する。

切り株の断面を見ると、中央付近は淡いピンクで周縁部が白い。美しい色のパランスも持ち味だという。

南三陸杉の歴史は古く、仙台藩祖伊達政宗が仙台城下のまちづくりで使用した



南三陸YES工房が南三陸杉で作ったテーブルや椅子

建材、家具…活用広がる

という記録が残る。伝統ある南三陸杉のブランド化を視野に協議会は2015年10月、町の森林でFSC認証を取得した。適切な間伐や労働環境の整備など、持続可能な林業を行っていることが認証の条件。現在は約2600畝と、町全体の森林面積の2割に認証林が広がった。

手入れが行き届いた環境で育った南三陸杉は町役場や町生涯学習センターなど地元公共施設の建材となり、新国立競技場（東京）でも一部用いられている。

活用の幅は家具や小物などにも広がる。町の「南三陸YES工房」は南三陸杉を使ったテーブルや椅子、コースター、一輪挿しなどの製造に取り組む。代表理事の大森丈広さん(38)は「ぬくもりがあって香りもいい。素材の良さを生かし愛される商品を作っていきたい」と話す。

「拡大・移動支局」は、より地域に密着した情報を集中的に発信する紙面です。